還暦を迎えて

東京秋工会　副幹事長
伊藤 幹夫
(昭和46年建築科卒)

ひとごとのように思っていた「還暦」が目前に迫ってきた。イコールおじいちゃんと思っていたこの言葉と関わり合いを持つとは・・・この言葉を見て見ぬふりをしてきたがやっぱり来てしまったか･･･という思いだ。

私のようなタイプは自覚症状があっても病院へ行かないで手遅れになって死ぬタイプかもしれない。

私はなぜ抵抗があるのかとちょっと考えてみた。私は旅行会社の添乗員をしていた20才代の頃老人会の旅行をよく手がけていた事があって老人会には60才以上の人が入会でき当時は多くの人が会員として在席し旅行となると観光バスを何台も連ねて走ったものだった。当時見る老人会のお客さんはそれはそれはお年寄りで自分がそうなるとは考えてもいなかった姿であった。今その域に居るとすればその姿を受け入れられず知らん振りしていたいということだろうと思う。秋工会からこの題材で寄稿するように言われ書けば自分で認めることになり抵抗はあったが現実なのでとうとう覚悟を決めた。「俺はもう還暦だ」実は白状すれば受け付けないのは気持ちだけで体は充分還暦に浸っている。

小学生から高校時代まで野球漬けの毎日で、冬の練習では毎日天照寺山まで何度往復して走っても疲れないという思いを持ったことを記憶している。しかしその体力がいつの間になくなってしまったのか。昨年地元のソフトボールチームから誘われて「高校時代落合（現中日監督）とバッテリーを組んでいて・・・」等と自慢げに参加したがライナーどころかフライもとれず後逸したボールを追う足元は前に進まず内野への返球は目の前まで来てくれる内野手へトスする有様。なんとも情けない。唯一の自慢の野球への自信が砕け散り体力のなさ、動態視力の減退に呆然とした。

二年ほど前秋田に里帰りして墓参りに行った時孫が目の前から突然消えた。私は向こう側の側溝へ落ちたと思い頭の中が真っ白になり反射的に孫の方へ飛び出したが足が付いていかず砂利道へヘッドスライディング。皆に大笑いされ己の足腰の虚弱劣化状態に信じ難い思いをした。歩くだけなら・・・と秋工会のハイキングクラブへお世話になり意気揚々と参加したが下りでひざに違和感を覚え一番若いのにペースを合わせてもらう迷惑をかけ　今では初級コース限定でお世話になっている。

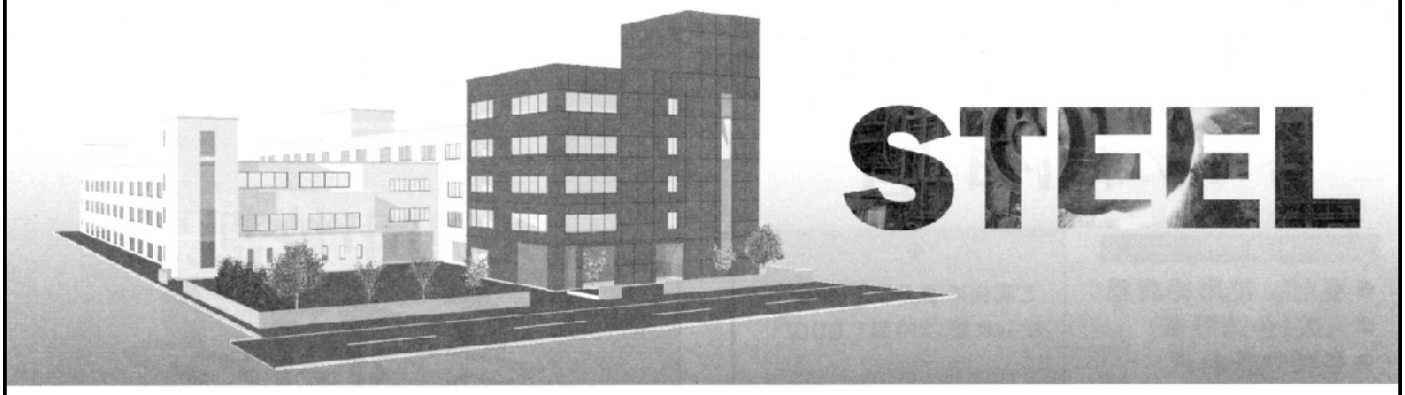
家に帰れば「お父さん」と呼ばれ、孫と会えば「じいじ」とよばれ秋工会に来れば「若い人・・・」で呼ばれ還暦は微妙な「年頃」だ。

その呼ばれ方で気持ちも違ってくる。「じいじ」と呼ばれれば返事も「は～～い」となる。秋工会に来れば「はい！」となる。

若さを保つにはどこに居るのが最適か。先輩諸氏を見て参考にしたいと思う。

結婚○○周年だとか還暦だとか年金だとか最近急にこれらの言葉が身近になってきた。現実を受け入れながら気持ちは老けないよう心身の鍛錬をしていかなければならないと思う今日この頃だ。

技術と信頼を誇る総合建築　有限会社 三田建鐵



代表取締役　三田高義（昭和26年建築科卒）

本社　〒332-0001 埼玉県川口市朝日2-1-14
電話　048-225-2521　FAX048-225-2523
Email　kentetsu@ouka-group.jp
Web　http://www.ouka-group.jp/kentetsu